
今日こそ晴れの日

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日こそ晴れの日

【Nコード】

N9836A

【作者名】

春

【あらすじ】

高校生になった翔平凡な人生を送る翔にいろんなハプニングが起き、翔を巻き込みます（多分）まあそんなこんな翔の人生（学校生活）はどうなるのか？

あいつの名前は翔！（前書き）

初めて書いた作品なので上手く書けたかどうかはわからないんでそこそこはよろしく！

あいつの名前は翔！

・・・俺の名前は門倉翔^{カドクラ ショウ}今年、受験を合格し来年度からは高校一年生になり楽しい学校生活を送る予定だったが、不慮の事故により死んでしまい今日この日お通夜が行われる予定だった・・・

「勝手に人を殺すな！」

バシンつと頭をノートかなにかで叩く音が教室中に響きわたる。

「（<―>）」

「顔文字で表現するな！」

今度は2回続けて頭が叩かれる音が響きわたる。「わかったから叩くのやめてくれマジで痛いから」

こいつの名前は立河

^{タチカワ リュウイチ}

竜一昔からの悪友で、いろいろな遊びを俺に勧めてくる、うざくてうざくてうざくてうざくてうざい面白い奴だ

「・・・5回もうざいって言うなよな・・・」

「ああすまん。さすがに言い過・・・」

なんでこいつ俺（作者）の声が聞こえるんだ？

「ふっふっふ。翔ちゃんはまだまだでちゅねー」

ああダメだ今、無性にこいつの顔面をぼっこぼこにしたい…と思ったらいつの間にか竜一は教室からいなくなっていた

逃げるの速いな・・・

つとそうだ、今は昼休みだった購買まで行って昼飯買ってこなきゃ
そう思い俺は購買へと向かった。

購買へ向かう途中いろいろなものを見た…

ズボンのチャックを開けたままの先生…

昼間から木刀を装備している不良…

相手の足を狙ったスライディングを練習する野球部員…

他には…

「そろそろ本編に戻れこの馬鹿！」

後ろから竜一がやってきた俺は無言を言わず、笑顔でボディを殴った

「翔…なかなかのもん持つてんじゃねえか」

「まあな、それなりに鍛えてますから」

竜一はその場に崩れ落ち、腹を抱えて眠るのでした…

俺が購買へ着くときにはほとんどのパンが売り切れてた。ジャムパンを買い、自販機でオレンジジュースを買った。人込みを避けるためにいつもと違う道を歩いていたらそこには女子生徒が一人倒れていた。

「確かあいつは同じクラスだったような」

あいつの名前は…借りにAさんだとしよう。Aさんはなぜ倒れてんだ？いやそれよりも生きてるのか？そんなことを考えていたらAさんの方から腹の鳴る音が聞こえてきました。

この展開…もしや俺はAさんにジャムパンをあげなければならないのか？

俺はちびっ子達のヒーローかいやあいつはあんこだ俺はあんこじゃねえジャムだ！

果たして廊下に倒れていたAさんは何者なのか？翔はちびっ子達のヒーローなのか？答えは次週！

「だから俺はちびっ子達のヒーローじゃねえジャムだあんこじゃねえ。ってかジャムパン持つてるだけだああ」

第2話 翔と竜一と α （前書き）

前回の続きです

第2話 翔と竜一とα

その彼女はこう言った

「だからあ今はジャムパンよりも焼きそばパンのほうが流行るって」

「人からパンを恵んでもらって何言ってるんだよ！」

「まあまあ、そこはあんまり気にしちゃ駄目だぞ」

「そこを気にせずどこを気にするんだよ！」

時間を遡ること数分前：

彼女は言った

「そのどなたかは知りませんが食べ物を持っていますか？」

あれ？やっぱりこれはジャムパンを渡さなければならぬのか？

選択肢

1

「渡す」

2

「渡さず見捨てる」

人として考えれば1番だけどこれを渡せば俺の昼飯が・・・仕方ない今日の昼飯は我慢するか

という結論に至った俺は倒れている彼女にパンを渡した。

彼女はすぐさま起きてジャムパンの袋を破りパンを食べ始めた。

そして現在に至る。

焼きそばパンとジャムパンについて熱く口論していた二人は周囲から変な目で見られていた。

昼休みの終わる頃になって竜一が戻ってきた。彼女から離れて竜一に一連のことを話した。

「ってか翔、お前羨ましいわあ」

「???なんで？」

「だって、彼女俺が見たかぎり一年で1番かわいいから」

まあ確かにそう言われてみれば一年にしては整った顔立ちだし、笑顔がよくに合うやつだったな・・・ってなんかよくあるべたな誉めかただなあゝ

「あつもうこんな時間だ」

「どうした？翔」

「いや掃除がそろそろ始まるだろ」

「そついやそろそろ始まるな」

「じゃつ掃除に行くか」

「あゝ掃除めんどくせえゝ」

まあ竜一の戯言はどうでもいいとして彼女の名前聞きそびれたな。まあまた今度に聞けばいいか。

・・・思っただけど今回ギャグがねえゝ

「まつ、翔の力量不足のせいだな」

「・・・俺の・・・せい・・・なの・・・か？」

いや、きつと俺の力量よりも作者の力量のほうがきつと低い！
よってこれは作者のせいだ！

「翔ちゃんは人のせいにするのが好きなんでちゅねー」

・・・こいつ、また人の心の叫びを・・・

この後の展開は言うまでもない・・・

第3話：翔の日曜日（前書き）

やっと休みになった翔の日曜日。翔は一日何をする??

第3話：翔の日曜日

さて今日は待ちに待った日曜日！

つつてもやることないし

うーんじゃあ町にでも行こうかな

町に着いた。ここは都会の中心部から離れているとはいえ、さすがに人が多いな。

「さて、どこから回ろうかな」

うーん、あっそういえば今日は俺が集めてるアーティストのアルバムが発売だったな。

よし、じゃあまずCDショップにでも行くかな。

えーと、確かこの辺にCDショップがあったような覚えがあるんだけどな。おっ、やっと発見したぜえ

さつさとCD買って、ゲーセンでも行こうかな。

「新品だから・・・ここらへんだな。おっ！あったあった。」

よし、じゃあこれ買ってゲーセン行くか。

さて、じゃあゲーセン行くまえにCDでも聴こうかな、

CDプレーヤーは小さい鞆に入ってたような、あれ？無い。

「何だこの紙切れ？」 『拝啓 門倉 翔 様

あなたのCDプレーヤーは私、立河 竜一が勝手にお借りしました。返して欲しければ、今すぐに私、立河 竜一に三年間服従致します。という内容のメールを送りなさい。 敬具

P・S 殺さないでね（´Д、`）『

竜一・・・覚悟はできてんのか？

まあ、CDぐらい家帰ってからでも聞けるからいいとして、ゲーセン行こーっと。さてと、やっぱりゲーセンといえば・・・

「格ゲーで勝負しようぜ！翔」

竜一がいた。俺はボディを殴り、悶絶している竜一をトイレまでひっぱって行った。竜一の口にトイレトペーパーを大量に詰め込み、ひたすらボディを殴り、逃げた。

・・・数分後

目が虚ろな竜一がやってきた。

「翔、お前はこんなさびれたジムよりももっといい場所へ行きな、そしてお前は世界を目指せ！」

こいつ、まだ冗談を言う余裕あるんだな。

まあこいつの戯言はほっというゲームでもするかな。

「竜一、久しぶりにレースでもするか？」

「おうやるやる。やりますとも、で金はそちらが払うんでしょ」

「馬鹿、ちゃんと自分の分くらい払え」

つと、今はレースに集中しなければ。

俺の選んだ車はバランス型のフツーなやつで、竜一はスピード重視の車を選んでいた。

(3 Three)

(2 Two)

(1 One)

GO!!

俺はまず、アクセルを踏みスピードを上げていく。

ギアをいれかえ進んで行った。

竜一のほうはすぐにスピードは上がるが、上手くカーブを曲がりきれず、スピードを落としていた。

勝負は互角だった。

最後の直線に入った。同じタイミングで入った俺達、しかしバランス型の俺の車はスピードが上がらず、最後の最後で負けてしまった。

結局、格ゲーもぬいぐるみを多くとる勝負も負けてしまった俺は、昼飯をおごる羽目になってしまった。

「いやー翔さんすみませんねおごってもらって。」

「いや、まあそれは別にどうでもいいんだけど。なんでお前の妹までいるんだよ！」

（竜一の妹の名前は立河 楓 タチカワ カエデ 糞生意気な中学三年）

「翔ってそんなこと気にするんだあゝ、器ちいさいなあゝ」

あつやっぱこいつ生意気だ

「まあまあこいつがゲーセン行ってくて言ったら勝手についてきたんだよ。」

はあゝ楓って相手するの苦手なんだよなあ。

「翔、パフェ

注文してよ」

「お前はパフェ食ってないで受験勉強すりゃいいだろ」

「いいじゃない別に、テストなんて授業聞いてればほとんどわかるんだから！」

お前は天才か！

まあ今日は結構楽しく過ごせたから、まだいい日だったな。

「さてと、そろそろ俺は帰るからな」

「あつ！そうだ翔、これ返しとくわ」

竜一の鞆からでてきたものはCDプレイヤーだった。この後、俺はダブル立河に別れを告げて家に向かって歩きだした。

さてと、それじゃCDでも聴こうかな

買ったばかりのCDのビニールを破り、CDをとりだした。

ヘッドフォンから聞こえる音楽に耳を傾けながら、俺は歩いていく。

「はあ、やっぱりナチュラルヘッド・ノーヘアーズの歌はいいなあ」

今なんか、周りの人から変な目で見られたような……気のせいかな」

俺は気温が一番高くなる午後2時、陽気に鼻歌を歌いながら家へ歩いて行った。

第4話：翔 + α + β （前書き）

翔の姉登場！！そして気になる α の名前も明らかに！

第4話：翔 + α + β

「ふあああ」

目が覚めた。俺は今日という日が来るのを心底嫌がっていた。Be^な
cause^{ぜな}姉が家に帰ってくるからだ。

・・・二度寝するか・・・

…数時間後

「……ろ。」

「…ばか…きろ。」

「起きろつつてんだろが！！このくそ馬鹿」

「うつせーな、あと10分寝かせろ」

・・・あれ??この声なんか聞いたことあるんだけど…

「ほう、この私にうるさいだと。いい度胸だ、三日後にお前を東京湾に沈めてやろうか?」

・・・どうしよう、この人は冗談を言わないから・・・

俺はすぐに起き上がり土下座した。

「すいませんでした。」

「んじゃ罰として昼飯と3時のおやつ作れ」

「わかりました。」

子供の頃の話だ、俺は姉と鬼ごっこをしていた。

最初、俺が鬼になり姉をタッチし、鬼が入れ代わった。そこまではよかった。

10秒ほどして姉が俺を追い掛けて来た。

あの頃は小さかったのであまり体力の差がなかった俺はすぐに追い付かれ、タッチされた。

タッチしたあと姉はこう言った。

「鬼ってね、人を殺すんだよ・・・」

俺に触れている手から殺気を感じた。

俺は姉の言葉を最後まで聞かずに走りだした。

振り向いたら、長い髪を漂わせながら走ってくる姉がいた。

俺は泣きそうになった。（てか泣いた）

家に駆け込み鍵を閉め、風呂の浴槽の中に隠れた。

パリーンとガラスの割れる音がした。俺は蓋を閉めて息を殺し、母が帰って来るのを待った。

ぺたっ、ぺたっ

と姉が素足で歩いて来る音が聞こえる。

ぺたっ、ぺたっ、

俺は姉が気付かずに通り過ぎて行くことだけを祈った。

ぺたっ、ぺたっ

近くまで来ているようだ。

ぺたっ、ぺたっ

俺は全身全霊で神に祈った。

ぺたっ、ぺたっ、ぺたっ、ぺたっ、

ゴンっ

・・・姉が何かにぶつかったみたいだ。ぺたっ、ぺたっ、ぺたっ

風呂場に着たようだ。

ばしゃばしゃと水の音が聞こえる。

多分、手を洗っているのだろう。

「・・・なぜ風呂の蓋が閉まっているの？お母さんはいつも換気のために開けていくのに？」

やばいやばいやばいやばい死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ

ぴちゃ、ぴちゃ

水で濡れた姉の足音が近づいてくる。

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ

俺は死を予感した。

その時！

「ただ今〱翔と椿、いい子にしてた〱」母が帰って来た。

俺は泣いたよ、嬉しくてね。

その日の夜俺の部屋に姉がきた、姉は

「私と鬼ごっこするときはこの世にやり残した事がないときにする
ことね」

そう言うとき笑いながら部屋を出ていった…

俺はその日から姉には逆らえない弟になってしまった。

というわけで、今は昼飯の材料の買い出し中。

なに作れば満足するかなあ

口に合わないもの作れば多分殺されるし、うーんどうしようかな。

インスタント・・・は駄目か。

あーどうしょ。

その時彼女は後ろからやってきた。

「おっす、翔なにしてんの？」

1話目と2話目に出て来たあいつか、確か名前は…

えーっと・・・

「香山 カヤマ 沙織 サオリよ。名前まだ覚えてないの？」

「あーあーそういえばそういう名前だったな。」

「もしかして、本当に覚えてなかったわけ？？」

「クラスのやつ二割なら覚えてるよ」

「まあそんなことはどうでもいいけど、何してんの？」

「じつわ・・・」

「ふーん、なら私が料理作ろうか？」

「お願いします。」

「決断速いなおい。」

「それよりも料理できんの？」

「あら、私一応家庭部に入ってるのよ。ちょっとした料理くらいなら大丈夫よ」

よし、それなら大丈夫だな。

「なら今日の12時頃に家に来てくれ」

「あつやっぱゴメン。今日これから友達と遊ぶ予定だったわ明日ならしいよ。じゃあねー」彼女はそういうと歩いて帰って行った。

・・・ジャムパン返せ・・・はあ、仕方ない出前とろう。

今日俺の財布から大量の金が失くなった・・・

出前とりすぎ・・・

第5話・翔＋沙織（前書き）

翔と沙織。 昼に沙織がごはんを作りに来るお話です。

第5話：翔＋沙織

昼頃になり、ピンポンというチャイムが聞こえた。
香山がいた。

「おつす翔、昼飯作りにきてやったよ。」

「はあ??なに言ってるんだお前?」

「いや、だから昨日は無理だから今日は大丈夫って言ったでしょ。」

あー確かに昨日そんなこと言ってたな。

「と言われても今日姉貴居ないから別にいいんだけど。」

「えー翔のお姉さん居ないの!?今日はお姉さん見たいから来たのに。」

来た理由それかよ。

「今日はパチンコ行って帰ってくるの夜だよ。」

「じゃあそれまで待つから家に居させてね。」

ふざけんな。俺は扉を閉めて、自分の部屋に戻った。
ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン

「うるせー!!」

俺は玄関の扉を開けた。

「お前速く帰れ。」

「今日は翔のために買い出しして来たのに・・・」
泣き出した。

「わ、わかった。わかったから泣かないでくれ。」

「やった。」 なにがやっただこのやろっ。

さて、こいつを家に入れてしまったからにはどうにかしないとな。
俺はとりあえず軽く掃除を始めた。

あいつは・・・どこに行きやがった。

「香山、どこ行った?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・返事無し。」

ああもうあいつはどこ行っただんだ?

俺はそこらじゅうの部屋を捜すが、見つからない。

というわけで、

「あつ姉貴なんでもう帰って来たの?」と言ってみたら、

「えつどこどこ。どこに居るの?」

引つ掛かってくれましたよ。

俺は香山を捕まえて、居間まで引つ張っていった。

「だって暇だったもーん。」

「暇だったもーん。じゃねえよ、どこに隠れてたんだよ。」

「あそこの押し入れ。」

あそこの押し入れって・・・まさか。

「お前ちよつと後ろ向いて。」

「はーい、でどうかした?」

「そのまま外まで前進。」

「なんで?」

「いいから。」

俺の予想通り、服に埃がたくさんついてた。

「というわけで埃掃ってから入って来いよ。」

「はいはいわかりましたよ。」

「はいは1回。」

「あんたはお母さんか!」

つーわけで、腹が減ったので昼飯の準備を始めた。

昼飯を準備しようとしたら香山が戻ってきた。

「翔、昼飯あたしが作るって言っただでしょ。」

「あ、いや、でも。」

「ほらほらどいたどいた。」

無理矢理台所から追い出された俺は、居間でテレビを見ていた。
少しして香山が料理を運んできた。

「はいよ、沙織特製のスペシャルディナーよ。」

まだ昼ですよ?ランチの間違いでは?

「まあいいや、いただきます。」

「おう、召し上がれ。言つとくけどおかわりないから。」
まだなにも言つてねえよ。

そんなこんなで香山と一緒に昼飯を食べることになった。

「はあーうまかつたうまかつたあ。」

「ほんとに?」

「ああ見た目は?ちょっとあれだけど、味はよかつた。」

「ああーよかつた。二つ目の料理塩と砂糖間違えたから一時はどうなるかと」

ベタな間違えすんなよ。

「はああ、お腹いっぱいになつたら眠くなつちやつた。翔ベツト貸して?」

寝る気がこいつ。

「やだ。」

「ありがと、で翔の部屋どこ?」
いや今会話になつてねえだろ。

「あつ多分ここだな。」

部屋見つけるの速いなおい。

「おやすみー・・・」

寝やがつた。つーか寝るの速つ。

まあいいや、あと片付けして俺も寝よ。

時間は午後6

時。そろそろ姉貴が帰ってくるはずだが・・・

来た。さて、じゃああいつを起こすか。

つてあれ??居ない?

あつ置き手紙が、

『翔へ 今日十分楽しめたので翔のお姉さんを見るのはまた今度の楽しみにします。それじゃ明日から学校でね。 P・S 顔にフエイスペイントしといたからね』

・・・俺はすぐに鏡を覗きこんだ。俺の顔は黒人並に黒かつた・・・

・

この後、姉貴に顔を叩かれまくった・・・

第6話：翔＋沙織＋竜一（前書き）

英語の授業の時のお話です。

第6話：翔＋沙織＋竜一

今日は1限目から英語だ。英語の授業は俺に心地よい睡眠をプレゼントしてくれる。

さーて、今日も眠いから寝よー。

その時

ブーン、ブーン、ブーン、と携帯のバイブが唸った。『新着メール一件』

俺はメールを見た。

竜一からだった、

『寝たらずぐに先生に言うからな（笑）』

こいつうぜーな。

返信をぽちつとな、

えっと『もしもそうしたらこの事を一生忘れません。』

送信っと

ブーン、ブーン、

俺はメールを見る。

『もう少し面白い返信期待したのになあゝ、がっかりだよ。』

返信をぽちつとな、

『さっきのメールをわかりやすく言えば、覚えている限りお前を追いかけて回すって意味だ。』

送信っと、

ブーン、ブーン、

俺はメールを見る。

『・・・先生に言うのやめときます。』

よしっこれで眠ることができるな。

俺は机に突っ伏して、目を閉じた。

・・・

・・・

・ブーン、ブーン、

携帯が鳴った。

また竜一か？

俺は新着メールを見た。

沙織からだった。

『寝たら顔にフェイスペイントいれてあげるからね。』

・・・返信をぼちつとな、『心の底から遠慮します。』

送信つと、

・・・ブーン、ブーン、

『そんなに遠慮するなって、かつこよくしてやるから、ね？』

ね？じゃねーよ。あの後、姉貴にどれだけ叩かれたことか・・・確か74回だっけ？

理由はお前に入れ墨は早過ぎるとかなんとか。入れ墨じゃなくてただの油性ペンだったのに・・・

返信をぼちつとな、

『次やったら・・・』

次やったらなんだ？何もすることねえから脅しにならねえし。

あっそうだ、

『次やったら俺がお前の顔にフェイスペイントいれてやるからな。』

送信つと。

あー寝むい・・・

ブーン、ブーン、

『ひどい私の顔を傷物にするつもり？翔ってサイテー。』

・・・謝ったほうがいいのか？

『ゴメン、ちよつと言い過ぎた。』

送信つと、

・・・俺言い過ぎたか？

ブーン、ブーン、

『悪いと思ってる？』

返信つと

『うん、まあ一応。』

送信つと

ブーン、ブーン、

『じゃあなんでもする？』返信つと

『できる事ならね。』

送信つと

ブーン、ブーン、

『じゃあ今度どこかに連れてって。』

・・・寝よ。

・・・

・・・

・・・ブーン、ブーン、『新着メール一件』

『返事返さないってことは無言の了承ってことね。じゃあ土曜の朝9時に駅前で待ってるから。』

おいこらのやろう。

勝手に決めんじゃねーよ。『ゴメン、土曜は竜一と先に遊ぶ約束したから。』

送信つと、

まあ勿論嘘だけどね。

ブーン、ブーン、

『ひどい、私なんかどうでもいいの？翔、私と友情どっちが大切な？』

・・・こいつムカつく。沙織のほうを見た。

必死に笑いをこらえていた。

・・・返信つと、

『わかったよ、連れてってやるからもう泣くな（笑うな）。』

まあ当日は行く気ないけどね。

キンコーンカーンコーンチャイムが鳴った。

あー結局全然寝れなかったな・・・

「竜一、次の授業なに？」

「確か体育だったろ。」

体育か、眠いからきついなあ。

「翔！土曜の約束守ってね。」

・

・

・

あーめんどくさい！！

第7話：翔＋沙織 その2

今日は土曜日。

沙織が約束（？）をした日からずつと

「映画へ連れてけー。」

というので結局映画へ連れてけ行くことになった。

・・・あいつ俺を便利な財布とでも思ってたのか？

まあ一応約束（？）は守らないと、サイテーな人と思われるから断れないんだけどな
はあーっーかあいつ遅いな。俺は約束の時間の20分前から待機しているつてのに。

ただ今7時52分。

沙織来る気配無し。

・・・ただ今8時、約束の時間。

沙織来る気配無し。

・・・ただ今8時15分。沙織からのメールあり。

『・・・どこそこ？』

知るか！

迷子になりやがったよ・・・この歳で・・・

『何か目印になるものある？』

『拳銃を持ったおっさんとそれを威嚇しないように捕まえようとする警察官・・・』

「・・・どこにいますか貴女は？」

『帰っていいですか？』

『待ってよ金づる！？行かないで。』

こいつ普通に金づるって・・・

よし、帰るか。

俺は帰ろうとしたが持っていた鞆を引っ張られたので後ろを向いた。

「帰るなよ金づる君。」

沙織が目の前に居た。

拳銃持ったおっさんと警察官はどうした？

「さっきのメールの事だけど。」

「あっさっきのメールの内容は夢の話だから心配しないでね。」

夢の話か・・・じゃなくて

「なんで遅れたんだ？」

「母親が危篤でさっきまで病院に居たの・・・」

病院行けよ、親不孝者。

「それで20分ほど前にいきをひきとったの・・・」

尚更病院に行けよ、超親不孝者。

「って言ったら許してくれる？」

とりあえずどこにチョップをいれて様子を見た。

・

・

・

「ひどい！翔ったら私を傷物にするつもりだったの？」

大きな声で喋るから周りの通行人がこちらを見ながら歩いて行く。

俺はとても恥ずかしい。

一方沙織は・・・まだ言ってた。

「翔、あなたがそういうつもりなら私達別れましょう。」

なんか勝手に別れ話にまで発展しちゃった！。

「お、おい。落ちて着け俺達付き合っていないだろ？」

「・・・あつそうだったね。てへへー私の勘違い。」

てへへーじゃあねーよ。さっきからのお前のトークで、俺がとてもひどい人に思われるだろ。

あーもう疲れた。

家に帰って風呂入って寝たい・・・

「ほら翔行くよ。今日は寄りたい所がたくさんあるんだから。」
行きたくないです・・・・・・・・・・

今日失ったもの

金と世間の評価と大切な土曜日（休み）・・・他多数のような気がするような・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9836a/>

今日こそ晴れの日

2010年11月13日14時41分発行